史跡「伝小栗判官主従・ 照手姫墓域」推薦文

この度、藤沢市指定文化財として推薦する文化財は、史跡としての「伝小栗判官主従・照手姫墓域」である。この墓域は藤沢市西富の時宗寺院である長生院内（藤沢市西富一丁目９番２７号）に位置する。

史跡「伝小栗判官主従・照手姫墓域」の構成要素は、長生院境内に建立された小栗判官伝承に語られる主人公の**小栗満重墓**、満重の妻となる**照手姫墓**（観音二尊脇侍有）、満重重臣である**十勇士の墓**、満重の愛馬となる**鬼鹿毛の墓（鬼鹿毛供養塔）**、照手姫建立の**厄除地蔵三躯**、**満重眼洗いの池**である。

さて、小栗判官とは、中世から近世にかけて流行した語りもの文芸の一つ説経節「をぐり」や浄瑠璃「当流小栗判官」などに登場する主人公小栗満重を指し、墓域群にて供養されるのは小栗満重を中心とした関連人物や愛馬である。小栗伝承は茨城県筑西市の常陸小栗氏をはじめ神奈川県内、藤沢市西俣野、相模湖町や城山町、岐阜県大垣市や垂井、熊野湯ノ峰など複数あるが、伝承の中心は長生院を中心とした小栗伝承である。長生院は、時宗総本山藤澤山無量光院清浄光寺（正中二年（１３２５）遊行四代呑海開山、藤沢市西富１丁目８番１号、以下、遊行寺）の塔頭であり時宗十二派のうち遊行派に所属していた。古来は遊行寺山内の閻魔堂であるが、永享年間（１４２９-１４１１）に小栗満重の妻となった照手が遊行十四代太空上人に帰依した後に閻魔堂に入住し満重と十勇士を供養したことから小栗堂と称された。小栗堂は、近世における各種遊行寺境内図や東海道名所図絵など地誌類において小栗堂と長生院の二棟続きの堂宇として記載されているが、小栗堂は現在の本堂位置となる。また『相州藤沢山遊行寺境内緒堂社畧繪圖』には小栗堂の裏手側に「同廟」の記載があり小栗満重墓等を示している。これら史料からは、この度推薦する墓域が近世には参詣対象として整備されていたことの証拠となる。

ここで長生院に伝わる『小栗畧縁起』を元に墓域が形成されるに至る経緯を紹介する。鎌倉公方であった足利持氏に謀反の疑いをかけられた常陸国小栗城主であった小栗満重と家臣十名は、落ち延びる途中、相模国藤沢宿の近くで、豪族横山太郎邸に身を寄せる。横山は馬術の達人と称された満重に対し人食い馬とされる鬼鹿毛を乗りこなせるか試されるが見事乗りこなしてしまう。そこで毒殺を謀る横山であるが、訳あって横山亭に身を寄せる照手が満重にその旨を伝える。しかし、照手の懸命な配慮も空しく、満重と十勇士は毒殺され金品を奪われる。上野ケ原に投げ捨てられ冥府におちた満重は、十勇士の嘆願を聞き入れた閻魔大王の慈悲と、夢告に導かれた遊行十四代太空上人の元に餓鬼阿弥として復活。土車に乗せられ、時宗立教開宗の地である熊野の湯ノ峰温泉へと送られる。湯ノ峰温泉のつぼ湯で湯治し蘇生を遂げた満重は、都で謀反の疑いを晴らした後に横山を討伐、照手姫との再会を果たす。満重は太空上人の慈悲により焔魔堂に入り応永３３年３月１６日（１４２６）往生した。（戒名：重厳院滿阿弥陀弥陀佛）その後に満重子息である助重も藤澤山に入り満重と十勇士の墓碑の隣に住まい菩提を弔った。永享元年（１４２９）照手は太空上人に帰依し長生比丘尼として閻魔堂入り満重主従を供養した。照手は閻魔堂の隣に厄除地蔵三躯を建立したとされる。照手は永享１２年１０月１４日（１４４０）往生した。（戒名：長照院壽佛坊）焔魔堂に併設された堂宇は後に長生比丘尼の名をとって長生

院と称されるようになった。この伝承を今に伝えるのが『小栗畧縁起』であり、天保１２年（１８４１）発刊の『新編相模国風土記稿』に記載される長生院解説は『小栗畧縁起』の内容を転載使用している。『小栗畧縁起』が小栗伝承の主軸となり流布していた事がうかがい知れる。

構成要素となる各墓であるが、**小栗満重墓**は石造宝篋印塔型（総高１６６.５㎝・火成岩製）である。**小栗満重十勇士墓**は石造宝篋印塔型の塔身部を丸石にした石造五輪塔（宝篋印塔様集積塔・火成岩製）である。１０塔のうち、１塔（総高８３.０㎝）に「重阿弥陀仏　応永２１年７月１３日（１４１４）」の銘が入る。**照手姫墓**は石造宝篋印塔型の塔身部を丸石にした石造五輪塔（宝篋印塔様集積塔）（総高１１０.０㎝・火成岩製）である。周辺に聖観音像を半肉彫した月窓妙鏡禅定尼墓碑（総高７７.０㎝・安山岩製）「銘　月窓妙鏡禅定尼霊位　貞亨五戊辰歳四月廿六日」（１６８８）と、舟形光背付聖観音像を半肉彫した聖観世音立像塔（総高８０.０㎝・安山岩製）「銘　奉供養七観世音菩薩　彦七母　長五良内　女講中仁兵衛内 伊兵衛母　長右エ門内　特左エ門母　半左衛門母　妙林　新五良内　七兵衛内」２躯がある。なお『小栗外伝三』（文化 11(1814)頃葛飾北斎画］には小栗満重墓、照手墓、満重十勇士墓の挿絵が記載されており江戸後期の状況を伺い知ることができる。元々宝篋印塔であった可能性もあり経年劣化などによる破損補修の為に現在の形になった事も推測できよう。満重愛馬である**鬼鹿毛供養塔**は石造角柱型（総高１０４.０㎝・花崗岩製）である。馬頭観世音菩薩を配し銘文は「宝暦五乙亥歳七月廿四日（１７５５）為馬神祭祠　藤澤道場」とある。馬を供養した慰霊塔は、遊行十四代太空応永２３年（１４１６）に建立した国指定史跡「藤沢敵御方供養塔」（怨親平等碑）が遊行寺境内にあり、順次往生を謳う畜類供養との関連性も見いだせる。**照手建立厄除地蔵**は三躯の石造地蔵菩薩立像である。三躯とも火成岩製である。（総高　中央１６３.０㎝・東側１５７.０㎝・西側１４３.０㎝）西側１躯の手には穴が空けられ何かを差し込んでいた様子もうかがえる。満重十勇士墓の東側にある**満重眼洗いの池**は、中央に聖観音を配置した池であり、満重が八徳水と呼んでいた事が『小栗畧縁起』に記載されている。

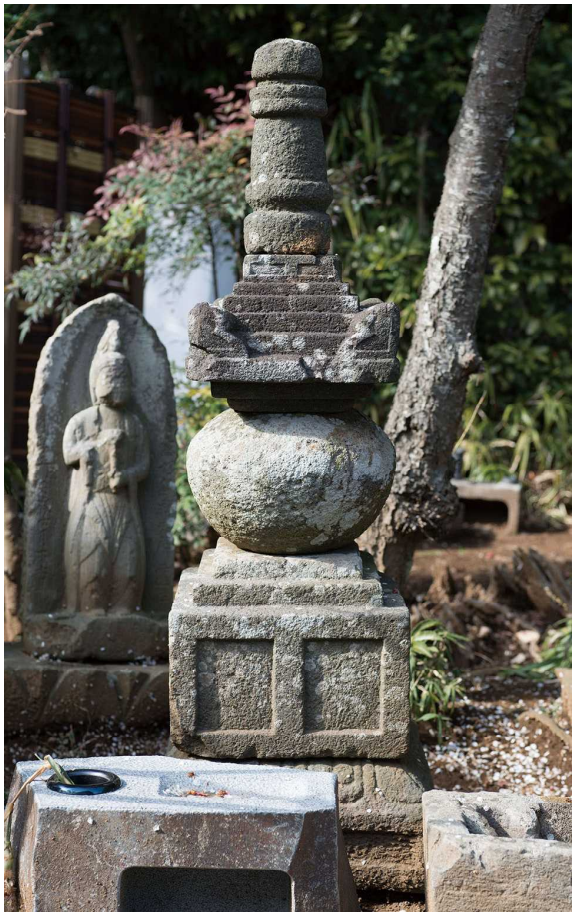
以上が、小栗伝承に関連した史跡「伝小栗判官主従・照手姫墓域」の概略である。これらは各地に伝承された小栗伝承の根幹となるものであり、藤沢市の文化財として内外に誇れる史跡である。よってここに史跡「伝小栗判官主従・照手姫墓域」を藤沢市指定文化財として推薦するものである。

令和５年７月２４日
遊行寺宝物館 館長
遠　山　　元　浩

史跡「伝小栗判官主従・ 照手姫墓域」参考画像

■小栗満重墓および小栗満重十勇士墓

■小栗満重墓



■照手姫墓

■照手姫墓（石造観世音菩薩脇侍）

■鬼鹿毛墓（上・右）

■満重眼洗池（八徳水）

■照手建立厄除地蔵